

学 長 選 考 公 報

学 長 選 考 手 続 管 理 委 員 会

第一次学長候補適任者

(50音順)

- 長谷川 照 (現職 国立大学法人佐賀大学長)
- 佛 淵 孝 夫 (現職 国立大学法人佐賀大学医学部教授
 - 医学部附属病院副病院長)

(その2)

推 薦 書

推薦者
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属

大石 祐司
佐賀大学
福本 敏雄
佐賀大学
諸 泉 俊介
佐賀大学
佐藤 武
佐賀大学
只木 進一
佐賀大学



氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属
氏名
所属

大石 祐司
佐賀大学
和田 康彦
佐賀大学
林 田 行雄
佐賀大学
井上 正允
佐賀大学
朱 雀 成子
佐賀大学



国立大学法人佐賀大学学長候補適任者として、下記の者を推薦いたします。

被推薦者 氏名 長谷川 照

(推薦理由)

被推薦者である長谷川照氏は、これまで学長として、法人化後の国立大学が抱える様々な課題に対して、学内の知恵を集めて取り組み、今期中期目標・中期計画の達成に努力してきた。そのことにより、本学は、限られた条件の下で、法人評価において概ね良好な評価結果を得ることができた。これは、同氏が学内外の様々な意見に耳を傾けながら、必要な場合には決断を躊躇せず、学長としての指導力を発揮してきたことによるものである。

また、同氏は、大学憲章の制定、中長期ビジョンの策定、次期中期目標・中期計画の基本的方針の取りまとめなど、常に佐賀大学の将来について考え、その方向性を学内外に示して来た。同氏が再任された場合には、その方向に向かって着実に前進するために、佐賀大学の役職員の力を結集し佐賀大学がその理念の実現に向かって持続的に発展していくための基礎をより強固なものにしていただけるものと期待している。

同氏は、人格が高潔で、学識が優れ、かつ、大学における教育研究活動を適切かつ効果的に運営することができる能力を有する者であり、将来の佐賀大学の発展の礎を確かなものにするためには、さらに2年間、学長の重責を担うことを長谷川照氏に要請したい。

(その3)

履 歴 書				
氏 名	ハセガワ アキラ 長谷川 照	男・女	生年月日	昭和14年1月 14日(満70 歳)
現住所	佐賀県佐賀市新中町 1-12			
学 歴	昭和34年 4月 早稲田大学理工学部応用物理学科入学 昭和38年 3月 同大学同学部同学科卒業 昭和38年 4月 京都大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程 入学 昭和40年 3月 同大学大学院同研究科同専攻修士課程終了 昭和40年 4月 同大学大学院同研究科同専攻博士課程進学 昭和43年 3月 同大学大学院同研究科同専攻博士課程単位取得 の上退学 昭和46年 3月 理学博士(京都大学)			
職 歴	昭和43年 4月 佐賀大学理工学部助手 昭和43年12月 佐賀大学理工学部講師 昭和46年 4月 佐賀大学理工学部助教授 平成 7年 4月 佐賀大学理工学部教授 平成10年 4月 佐賀大学評議員 平成12年 4月 佐賀大学副学長 平成12年12月 佐賀大学理工学部長 平成14年12月 佐賀大学理工学部長(2期目) 平成15年10月 佐賀大学学長(佐賀大学・佐賀医科大学統合) 平成16年 4月 国立大学法人佐賀大学長 平成17年10月 国立大学法人佐賀大学長(法人1期目)			
資 格	なし			

(その5)

所 信 表 明 書

平成21年4月10日

氏 名 長谷川 照

文部科学省の国立大学法人評価委員会は、第1期中期目標期間に係る佐賀大学の業務の実績に関する中期目標達成状況を5段階評価によって公表した。教育と研究については共に5段階の中位に相当する「おおむね良好」、社会貢献は5段階の4に相当する「良好」、業務運営、財務内容等については全て「良好」と評価され、評定項目7項目中5項目について「良好」の評価を得た。本学は、旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合と新佐賀大学の法人化が重なり、旧両大学の教職員の多大な苦勞と努力を思えば、胸を張ってよい評価と思っている。この苦勞と努力を第2期中期目標に結集し、最高の評価「非常に優れている」の獲得に向けて挑戦したい。そのために、第1期中期目標期間に策定した「佐賀大学中長期ビジョン」を具現化することが急がれる。とくに、中長期ビジョンの全体を貫く脊柱を形成する“学士課程から博士課程まで教育の根幹と位置づける「新たな教養教育」”を創り上げることが焦眉の急である。

(1) **教育先導大学** 本学の教育目的は、際立つ個性と豊かな知性・感性を身に付け、現代社会の動向を的確に捉えてリーダーシップを発揮するプロフェッショナルを育成することである。そのために、現代の諸問題に目を向け課題を発見し解決に向けて取り組む姿勢を養う「新たな教養教育」を創出すること、各分野の学士課程教育にこの「新たな教養教育」を重点的に位置づけること、総合大学の利点を活かし他分野まで専門性を広げること、以上の三つの観点から学士課程を構想する。現在、21世紀の大学教育のあり方が中央教育審議会の大学分科会で精力的に審議されている。教育先導大学を掲げる本学の学士課程構想は大学分科会に先行する佐賀大学モデルであり、佐賀の大学として学内外の期待を取り込んだ学士課程を実現したいと考える。

(2) **基礎研究と重点研究** 研究活動に関する評価の中で、農学研究科（基礎・基盤研究）と海洋エネルギー研究センター（重点研究）における研究成果は高い評価を受けた。前者は鹿児島大学大学院連合農学研究科（後期課程）に参加し、後者は全国の共同利用施設として、何れも本学以外の研究者と切磋琢磨する環境の中で研究活動が行われている。このような研究環境を学内外において醸成し、若手研究者を育成して、第2期目標期間に研究成果を大幅に改善したい。また本学は、海洋エネルギーの研究に続く全国的共同利用を目指す重点研究として、シンクロトロン光応用、有明海・低平地、海浜台地、地域学、地域医療科学など多くの特色ある研究を抱えている。国立大学法人評価委員会は、「シンクロトロン光利用の研究がこの分野の中心的

存在になっている」と特記している。この研究への全国的な期待に応えたい。

(3) **附属病院の整備・再開発** ここ数年の医療不安と近々の雇用・年金問題と相まって社会的不安は増大している。本学は、地域医療機関や行政との連携を深め住民の安全と安心に応える責任がある。附属病院の整備・再開発を高度先進医療の発展及び地域包括医療の向上の契機にしたい。

(4) **佐賀の大学** 産学官包括交流協定の締結を「佐賀の大学」として本学の努力が県民・市民に認められた結果と捉え、事業全体を統括する体制を早急に整備して期待に応えたい。

(5) **大学のグローバル化** 九州・環黄海沿岸地域を中心とした諸外国との大学間における相互留学プログラムのネットワークを構築し、国際的な教育研究拠点を育成する。また留学生30万人計画を視野に入れ、本学に入学を志願する人々を日本からアジアに拡大し、質の高い留学生を受け入れるための環境を整備したい。

(6) **女性の地位向上** 女子学生の増加に伴う大学環境の整備、女性教員の増加、女性の経営参画する大学運営など男女共同参画事業を進めたい。

最後に、大学の持続的発展のために、教職員の雇用の安定と健全な労使関係を重視しワーク・ライフ・バランスに配慮した働きがいのある大学を目指す。

推 薦 書

推 薦 者

氏名 杉岡 湧一 (印)
 所属 九州大学元総長
 氏名 山口 雅也 (印)
 所属 元佐賀医科大学長
 氏名 中富 海隆 (印)
 所属 祝製薬株式会社社長
 氏名 十味 忠秀 (印)
 所属 佐賀県医療統括監
 氏名 瀬口 昌洋 (印)
 所属 農学部

氏名 木村 靖夫 (印)
 所属 文化教育学部
 氏名 萩原 世也 (印)
 所属 佐賀大学理工学部
 氏名 木口 量夫 (印)
 所属 佐賀大学理工学部
 氏名 米倉 茂 (印)
 所属 佐賀大学経済学部
 氏名 増子 貞彦 (印)
 所属 佐賀大学副医学部長

国立大学法人佐賀大学学長候補適任者として、下記の者を推薦いたします。

被推薦者 氏名 佛淵 孝夫

(推薦理由)

新学長候補適任者として佛淵孝夫氏を推薦します。佛淵氏を表す代名詞はなんといってもそのバイタリティにあります。現在附属病院の経営担当副病院長として、また医療情報部長として、かつ整形外科主任教授として一人三役をこなしています。それぞれの役職は大変な激務であるにもかかわらず、的確にこなす姿は佐賀大学の誇りです。経営担当副病院長として、ベンチマークを取り入れた病院経営を実践するなど、卓越したアイデアの持ち主であり、かつそれを実践することができる信念の人であります。就任以来、病院の収支は改善しており、すでに効果が現れています。また附属病院は全国に先駆けて電子カルテが導入されており、そのバージョンアップ時の困難な状況でも、適材適所の人員配置を行うなど、優れた指導力でスムーズな運用ができ他大学の模範となりました。そして整形外科の主任教授として10年間、特徴ある診療・教育・研究を実践しています。股関節外科の第一人者であり全国から重症患者が集まり、日本一の手術症例数を誇っており、附属病院の一大看板となっています。その臨床に対する真摯な姿勢は全国の整形外科医の憧れとなり、数多くの見学者が佐賀大学を訪れています。海外からも数多くの留学生を受け入れ、国際的交流にも努めています。新しい術式の開発にも積極的に取り組み、国際的にも高い評価を受けています。また研究者としても既存の性能を超える新しい人工関節の開発のための研究開発プロジェクトを立ち上げています。このプロジェクトには佐賀大学を中心に4大学の14研究室と企業などが結集しており、そのリーダーとして活躍しています。このような医工連携が成功している例は極めて稀で、佛淵氏の人柄・指導力のなせる業であります。56歳というその若さは何事にも変えがたい強みであり、この厳しく困難な時代の大学運営において、大いなる力となるものと確信しています。

(その3)

履 歴 書				
フリ 氏	カナ 名	ホトケブチ タカオ 佛淵 孝夫	男・女	生年月日 1952年4月28日 (満56才)
現住所	福岡市西区愛宕浜4丁目22-6			
学歴	昭和54年3月 九州大学医学部卒業			
職歴	昭和54年6月 九州大学医学部附属病院研修医 (整形外科) 昭和56年6月 福岡県立粕屋新光園 (医師) 昭和56年12月 福岡赤十字病院整形外科 (医師) 昭和57年12月 山口赤十字病院整形外科 (医師) 昭和59年6月 九州大学医学部附属病院整形外科 (医員) 昭和60年9月 国立福岡中央病院整形外科 (医師) 昭和61年9月 九州大学医学部整形外科 助手 平成3年3月 米国メイヨークリニック留学 平成4年3月 九州大学医学部整形外科 助手 平成5年3月 同 講師 平成9年4月 同 助教授 平成9年10月 佐賀県立病院好生館整形外科 医長 平成10年9月 佐賀医科大学整形外科 教授 平成13年4月 佐賀医科大学附属病院 材料部長併任 (平成15年9月まで) 平成15年10月 佐賀大学医学部整形外科 教授 (統合による) 平成20年4月 佐賀大学医学部附属病院 副病院長併任 (経営企画担当) 平成20年6月 同 医療情報部長併任 現在に至る			
資格	昭和54年5月 医師免許 (医籍登録番号 第245080号) 平成元年2月 整形外科専門医 (第108027号) 平成2年1月 医学博士 (医博乙) 九州大学 (登録番号第1438号)			

(その5)

所 信 表 明 書

平成 21 年 3 月 23 日

氏 名 佛淵 孝夫

(所信)

佐賀大学は統合後 6 年、法人化後 5 年近くが経過し、この間に大学憲章の制定、第 I 期中期目標・中期計画の策定と実施（評価）、中長期ビジョンの策定がなされました。佐賀大学憲章には、「魅力ある大学、創造と継承、教育先導大学、研究の推進、社会貢献、国際貢献、検証と改善」が明記されています。佐賀大学中長期ビジョン（2008－2015）では「地域と共に未来に向けて発展し続ける大学を目指して」と謳われています。

法人化後の大学運営はますます困難な時代となっていますが、佐賀大学の理念と展望は明確にされていますし、その方策も示されています。これらを実現するには全学一体となった「夢」と「戦略」を持つことであると信じます。教職員に夢と活力がなければ教育・研究・社会貢献の実現は困難です。学長自らが楽しく仕事をし、夢を語れる存在でありたいと思います。良い教育を行い誇るべき研究成果と社会貢献が達成できれば、学生に選ばれ、卒業生の誇りになり、発展し続ける大学になります。

今後の課題は、これらの大学憲章や中長期ビジョンを具現化するための次期中期目標・中期計画を着実に実行し、評価に耐えうる成果を達成することにあります。そして、さらにそれらの実践と検証の課程で 10 年後、50 年後の佐賀大学のあるべき姿を探り、「夢」を膨らませていく必要があります。

以下に、中長期ビジョンに加えて、さらに私が取り組んでいきたい方針について述べます。

教育

憲章にもあり、現在各学部やセンターなどで取り組んでいる「教育先導大学」をさらに発展させ、学生に選ばれる大学を目指します。教養教育や専門教育以外にも様々な機会を利用して社会の一員としての基本的な自己管理・危機管理の教育にも力を入れたいと思います。学生生活から就職活動、さらには就職後まで「面倒見の良い」教育を進めたいと思います。卒業生が愛校心を持ち続ける教育を目指します。

研究

これまで本大学が取り組んできた「海洋エネルギーの先端的研究」など、佐賀大学ならではのテーマを軸に世界に通用する研究テーマの絞込みを行います。研究では「特化」することが求められており、「ニーズ」と「シーズ」の融合などを通して具体的な

戦略を全学的に展開します。産官学共同研究をこれまで以上に推進しますが、中央の大きな大学と比較すると条件は不利です。そのためにも特色ある研究テーマへの取り組みを推進します。

社会貢献

地域に根ざしつつ国際的な視野に立つ貢献を推進します。現在行われている地域社会への貢献をさらに発展させるために、大学が持つ多様な知的資源が地域社会、行政、企業などに貢献できるシステム作りを行います。そのためには学外に向けては分かりやすい情報発信を、学内向けには貢献度を教育・研究と同等に評価します。

国際貢献では留学生などに対する支援を大学の責任で行い、各講座や研究室が留学生を受け入れやすい環境を整備する。学術交流提携校との連携では積極的に教員間の共同研究などを推進します。

地域包括医療における貢献に関しては次期中期計画・中期目標の中で附属病院の再開発が計画されていますが、今後 50 年に亘る高度な診療・教育・研究活動の拠点となるべきものです。中身の吟味は当然のことながら、建設費の大部分は病院収入から返済する必要があります。したがって、病院再開発においては、学長や病院長のリーダーシップの基に病院の経営基盤を強化しつつ、文部科学省などと交渉を行い、財政的な負担を減らすことも大きな使命と考えます。

大学運営

全学教職員の意識改革とともに、具体的な課題・目標ごとに担当者の「責任と権限」を明確にし、学内外の英知を「ブレイン」として登用する体制作りを行います。スリムで効率的な大学運営により、本来の業務により多くの時間と労力がかけられる体制を目指します。質の高い運営は効率的な運営に繋がります。根拠のある資料・データを基に納得のいく資源の再配分と適材適所の人員配置により「生産効率」と「分配効率」の改善を推進します。

座右の銘は「志は高く、そして創意工夫」です。